



歌舞伎役者

市川染五郎さん

歌舞伎という伝統芸能を支える若手歌舞伎役者であり、他方、ドラマ・映画にも大活躍の市川染五郎さん。

4歳の長男の初舞台という一大行事を6月に控えた染五郎さんに、歌舞伎のイロハ、建替え問題に揺れる歌舞伎座に対する思い、そして、歌舞伎役者としての矜持まで、いろいろなお話を伺った。

（聞き手・構成：田中みどり、石渡幸子）

——歌舞伎以外にもドラマや映画でもご活躍ですね。

ありがたいことに、いろいろなことに挑戦する機会をいただいております。

私にとって、テレビや映画に出るのは、歌舞伎の宣伝のため、あるいは歌舞伎に役に立つから、といった考えからではありません。テレビや映画の役者としてもどこまでアピールできるのか、という思いでやっています。歌舞伎だけでなく、どの世界でも生半可な努力や覚悟では認めてもらえないと思っています。

——弁護士役にも興味がありますか。

リアルな世界では経験できない職業ですから、バーチャルな世界だけでもぜひ経験してみたいです。役柄の上では、正義の味方が悪徳か（笑）というのはどちらでもいいのですが、悪人であれば知能犯のような計算し尽くすタイプとか、善にせよ悪にせよ頭の使い道が極端なタイプの役柄は、ぜひやってみたいです。

——小さいときから歌舞伎役者の道を歩もうと思っていたのですか。

私の初舞台は6歳のときです。家族・親戚は歌舞伎役者ばかりですが、誰から強制されたわけでもなく、

その頃までには、お芝居の真似事をして見得を切ったり、立ち回りをしたりして遊んでいました。初舞台のときも、ご挨拶だけでは物足りなくて（笑）、もっと舞台に出たいとおねだりしました。同じ月に子役が出るお芝居がいくつかあったので、月の途中からそのお芝居に出させていただいたのが、とてもうれしかったです。

とにかく歌舞伎が大好きで、子どもの頃も、姉（松本紀保さん）や妹（松たか子さん）を無理やり相手に仕立てて、歌舞伎ごっこをしたりしていました。

——NHK教育テレビの「からだであそぼ」（現在は「あさだ！からだ！」）でも、子どもたちに歌舞伎の楽しさを伝えていますね。

あれは別の方がなさった作詞・作曲をもとに、私が振りをつけました。私自身は、歌舞伎役者一家のなかで育ってきたので、小さな子どもの目から見ると大人の世界はとても面白くて、見てきたものをそのまま真似をしたり遊んだりしていました。それと同じような雰囲気、玩具というか、遊び道具の1つみたいな感覚で子どもたちに歌舞伎を身近に感じてもらえればいいなどの思いから作ってみたのですが、いくつかバージョンがあります。



——日本舞踊の松本流家元でもいらっしゃいますが、お稽古も小さいときからやっているのですか。

歌舞伎役者は、日本舞踊だけでなく邦楽と唄も必須です。ですから、私も、5歳から日本舞踊を始め、徐々にお稽古を増やしていき、最終的には長唄、三味線、鼓、太鼓、清元、狂言、義太夫を習いました。日本舞踊は3ヶ所お稽古に行っていましたので、毎日毎日、お稽古を掛け持ちしている生活でしたが、それも全く苦にならないばかりか、どれだけお稽古に行けるかな、ということばかり考えていたほど、歌舞伎にのめり込んでいました。もちろん、学校には行っていたのですが、その時間は「お稽古をやらない時間」という感じでしょうか(笑)。

——歌舞伎の舞台の配役は重要ですね。

プロデューサーが出し物を決めて配役を決める場合もあれば、ごく稀に、大先輩から芸を伝承させたいとのことで声をかけていただく場合もあります。同じ役をやる場合でも、共演者が異なると、ちょっとした息やタイミングも異なりますし、それぞれのお家によって「型」が違う場合もありますが、それもまた共演する側としても、なかなか面白いものです。また、大阪を中心とする上方の芝居はとても特徴的で、上方の方と一緒に芝居をやると、ああ、こういう解釈もあったのかと、とても刺激を受けます。

——歌舞伎の衣裳にも決まりごとがあるのですか。

歌舞伎の衣裳は、昔は歌舞伎役者が自前で誂えていた時代もありましたが、今は、専門の会社に取り扱っています。歌舞伎は、色彩とか形も含めた美しさを大切にします。役を象徴するような色合いとか、役の感情によって衣裳を変えたりします。これには決まりごとがあり、昔からずっと着続けられている柄や色の組み合わせも多いのですが、今の時代から見ても、これらは非常によく考えられて作られているなあと感心します。このような衣裳は、毎日舞台で着るものであり、いわば消耗品なので時期がくれば新調しなければなりません。職人さんには、一応、

色や柄を指定しますが、ただでさえ染物というのは、染め上がって見ないとわからない部分がありますし、それ以前に、着物人口が減っている関係で着物の職人さんの数も減っているという現実があるので、新調するといっても、とても難しいのです。ですから、今ある衣裳を本当に大事に着ていかないといけないと常に意識しています。もちろん、お芝居の内容によっては、新しい柄や配色の衣裳を作るといっても当然あり得ます。

——立役、女形はどのように決まるのですか。

自分の「お家」の影響によって決まるとは思いますが、私の場合でいえば、とにかく歌舞伎の舞台に何でもいから出たいという強い気持ちがあったため、いずれの立役、女形にもこだわらないことにしております。

——「高麗屋！」という掛け声にも決まりはあるのですか。

役者の登退場や演技が形よく決まったときに客席から大きな声がかかりますが、芝居とのタイミングが大切ですのでなかなか難しいと思います。「大向う」という掛け声をかける人の集まった会も組織されており、歌舞伎座では三階客席の隅におられます。でも、積極的に推奨するわけではありませんが(笑)、本当に芝居が好きな方で一階席から声をかけられる方もたまにいらっしゃいますよ。内心、役者としては嬉しいものです。

普通に考えれば、役になりきって芝居をやっている最中に、役者の名前を大きな声で呼ばれたら芝居がぶち壊しになるでしょうが、歌舞伎の場合は、それが逆に効果的に舞台を盛り上げるのですから不思議です。

——歌舞伎座の建替えが問題になっていますが、歌舞伎役者の立場からはどのような思いをお持ちですか。

歌舞伎はマイクではなく地声で演じるので、劇場の音響は非常に重要なのですが、現在の歌舞伎座は音響面で非常によく考えて設計されています。また、



劇場内の雰囲気も温かみがありますし、私の初舞台もこの歌舞伎座で、とても思い入れがある劇場なので、歌舞伎座が建替

えになるのは本当に残念で寂しいことです。ただ、新しいものをつくる以上、今の歌舞伎座をわざわざそのまま復元するのではなく、日本の伝統芸能である歌舞伎のための専用劇場として、最先端の技術を駆使し、新しい形に発展したものが出来上がって欲しいという期待もあります。

——劇場という建物だけでなく、お芝居も時代によって変化があるのでしょうか。

芝居のストーリーまでは大きく変わらないとしても、舞台の大きさや照明技術によっても演出が変わりますし、お話自体も、古典劇もあれば新作物もあります。

歌舞伎役者と言うならば、とにかく先輩たちの芸や芝居を「なぞってなぞって自分の体で覚えていくこと」が大切です。もちろん、なぞろうとしても、すぐにそのとおりできるわけではありませんが、その気持ちを常に持つということが重要です。そして、その身体で覚えた伝統的な部分をしっかりと踏襲したうえで、新しい解釈やニュアンスを加えていくという挑戦をすることが「進化」といえるような気がします。

また、歌舞伎は、一見、格式ばったものに思われがちですが、能や狂言などの他の伝統芸能を取り入れて舞台を造りあげたりしますし、時代背景によって、たとえば忠臣蔵の「大石内蔵助」を「大星由良之助」に名前も変えてアレンジしてしまったりするなど、実は、非常に柔軟性があるのです。

—— 4歳の長男の^{いつき}齋くんの初舞台が決まりましたね。

2歳のときに初お目見得をさせていただきましたが、今年の六月大歌舞伎で、「四代目松本金太郎」を襲名させていただくことになりました。これは、曾祖父の時代から伝わる伝統的な名跡で、私も6歳か

ら8歳まで「三代目松本金太郎」でした。齋自身も歌舞伎が大好きで早く芝居をしたいと言っており、本人も今度の舞台をととても楽しみにしています。

歌舞伎座の建替え時期が延び延びになった影響で、齋の初舞台を歌舞伎座で行うことが実現できることになり、それ自体は本当にありがたいことです。本人の記憶に意識として残るかどうかはともかく、「この歌舞伎座の舞台に立った」という事実は、齋の人生を通じて大切な宝物になると思うからです。

—— 染五郎さんは8歳で「七代目市川染五郎」の名跡を襲名したとのことですが、齋くんも遠からず「市川染五郎」を襲名する可能性もあるのでしょうか。

これは個人の問題ではとどまらない部分があります。ご存知のとおり、私の父は、二代目松本金太郎、六代目市川染五郎を経て、九代目松本幸四郎の名跡を継いでいます。もともとは幸四郎の名跡が留め名でしたが、八代目松本幸四郎だった祖父がさらに「松本白鸚」を自分で作ったということもあり、今後、父が白鸚を継ぐかどうかはわかりません。したがって、齋がいつまで四代目松本金太郎のままなのか、また、私の七代目市川染五郎がいつまで続くのか、ということも、全く未定といったところです。

とりあえず、名跡のことはさておき、齋の四代目松本金太郎としての初舞台を無事に済ませ、齋の歌舞伎に対する興味や好奇心を大切に応援していこうと思っています。

—— 2歳になるお嬢さんには、どのような期待をしていますか。

まだ幼いこともあり、歌舞伎座や稽古場に連れていくことはありますが、特に何かお稽古をやらせる、というのではなく、娘が何かやりたいことを見つけ、それに熱中できる環境を作ってあげたいと思っています。私の姉や妹は、それぞれ役者の道に進み楽しくやっているようで、家族としては嬉しいことですが、できれば、娘には、役者以外の何かをやって欲しいなと思っています。世の中には役者以外にもいろいろ



歌舞伎のような文化・芸能は、人間にとっては絶対必要なものだと思いますが、「人間の生き死に」には関係しない、いわば社会の余裕部分としての存在価値があるのだと思いますし、それを意識しています。

市川染五郎

な分野がありますし、一家に1人位、他の道にいてもいいかなと。

—— 染五郎さんにとって、歌舞伎とはどういうものなのでしょう？

歌舞伎のような文化・芸能は、人間にとっては絶対必要なものだと思いますが、「人間の生き死に」には関係しない、いわば社会の余裕部分としての存在価値があるのだと思いますし、それを意識しています。そうでないと、「どうです、歌舞伎はすごいでしょ」とか「あなたたちと違ってすごいことをやっているんです」というような押し付けがましい説教者のようになってしまいます。歌舞伎は商業演劇です。

また、私個人としては、歌舞伎を中心とした日常生活ではありますが、「歌舞伎が仕事か」と聞かれると、違うような気がします。もし、仕事と考えてしまうと、なんとなく息苦しくなってきたり、やはり長続きしないでしょう。ただ純粹に、私は、歌舞伎が好きなのだと思います。

—— 今年1年の抱負をお聞かせください。

歌舞伎役者としては、どれだけ何を吸収できるのか、この5年間で勝負だと思っていますし、舞台に立ち続けているうちに見えてくるものもあると思います。

これは、息子の成長とは別に、私自身の歌舞伎役者としての思いです。そして、その間に、新・歌舞伎座も完成しているでしょうが、新しい劇場を今まで以上に盛り上げていくために、自分に与えられた役割をきちんと果たしていく責任があると思っていますので、少しでも歌舞伎役者として前に進んでいきたい。そのこともあり、当面、他の仕事は遠慮して、歌舞伎に専念する予定です。

—— 弁護士に期待することは？

先ほども言いましたが、歌舞伎は「人間の生き死に」の場面においては不要ですし、役者もバーチャルな世界を演じています。しかし、弁護士さんの仕事は、まさにリアルな社会で人間の生死に直接関わっているものであり、本当に大変なお仕事ですね。ぜひ、弁護士さんには、今後も社会をしっかり支えていていただきたいと思います。

プロフィール いちかわ・そめごろう

1973年生まれ。歌舞伎界でいま輝いている若手花形の一人。豊かな演技力で、古典はもとより『昔語黄鳥墳』のような復活狂言、新作歌舞伎まで果敢に挑戦する。屋号は高麗屋。二枚目から実悪、色悪、女方まで演じる。また、『アマデウス』などの現代劇や、劇団☆新感線との舞台などでも活動している。テレビや映画『蝉しぐれ』など、歌舞伎以外でも幅広く大活躍している